

平成 27 年度 大阪府立芦間高等学校 第 1 回 学校協議会

日 時 平成 27 年 7 月 27 日(月) 午後 2 時 00 分～午後 4 時 50 分

場 所 本校 4 階 図書室

構成員 <協議会委員>

河合 多賀子	P T A 会長
竹田 晴彦	守口市立第一中学校 校長
藤田 俊和	後援会会長
前川 新三郎	元 近畿大学教職教育学部 教授
宮坂 政宏	週刊教育 P R O 編集委員
山崎 裕也	スクール I E (塾) 京阪エリアマネージャー

<事務局>

高橋 雅彦	教頭
山田 英章	事務長
甲斐 徹	首席 兼 情報部長
辻 真人	首席 兼 総務文化部長
塩崎 靖子	指導教諭
若林 博行	教務主任
松本 清豪	生徒指導主事
阿野 高明	進路指導主事
槇田 純子	保健主事
岸本千都子	第 1 学年主任
飯尾 勝紀	第 2 学年主任
杉野 正	第 3 学年主任
水嶋 育美 (大西利男)	支援教育コーディネーター (校長)



配付資料 1 平成 2 6 年度 学校経営計画及び学校評価
2 平成 2 7 年度 学校経営計画
3 資料 A 0 1 全般プレゼン資料
4 資料 B 0 1 ～ B 0 9 他校視察報告等
5 資料 C 0 1 成績と進路実績との関連データ

内 容

- (1) 学校長挨拶
- (2) 委員紹介及び事務局紹介
- (3) 会長選出 …………… 委員互選により河合委員様を会長に選出
- (4) 会長挨拶
- (5) 報告 [[1]平成 2 7 年度学校経営計画とその進捗状況について
[2]参考にしたい他校の取組みについて]

○他校視察について

- ・ 三重県立津 (つ) 高校 (H 2 6 年度視察) : アクティブ・ラーニング推進、家庭学習時間の調査及びその活用、凡事徹底
- ・ 学校法人佐藤栄学園花咲徳栄 (はなさきとくはる) 高等学校 [埼玉県] (H 2 7 年度視察) : アクティブ・ラーニング推進委員会設置、校内教員向けアクティブ・ラーニング通信、中学生向け広報誌にアクティブ・ラーニング記事、家庭学習時間の調査及びその活用、P D C A (能率) 手帳の活用、甲子園出場
- ・ 広島県立廿日市 (はつかいち) 高校 (H 2 7 年度視察) : アクティブ・ラーニング推進、I C T 活用推進、中学生向け広報誌にアクティブ・ラーニング記事、家庭学習時間の調査及びその活用、「本時の目標」の明示・明確化と授業の最後における「振り返り」の徹底

○校内研修について

- ・産業能率大学教授小林昭文氏を招聘（H26年度実施）：アクティブ・ラーニング実践（55歳にして、生徒の主体性を追求したアクティブ・ラーニングに積極的に取り組む。）
- ・府教育センター附属高等学校首席山元聡氏を招聘（H27年度実施）：「総合的な学習の時間」に企業及び地域との連携を取り入れた「協働」的学びの実践、適応指導教室の活用事例
- ・府立東百舌鳥高等学校教諭稲川孝司氏を招聘（H27年度実施）：21世紀型スキルとICT活用、21世紀に向けて生徒に求められる力、東百舌鳥高等学校でのICT活用実践
- ・埼玉県立総合教育センター指導主事飯窪真也氏（東京大学大学発教育支援コンソーシアム推進機構（C o R E F）から出向）を招聘（H27年度実施）：アクティブ・ラーニングの一つの形態である知識構成型ジグソー法（埼玉県教委は、C o R E Fと連携し、県全体でこの授業スタイルを推進。）

○校内での取組みについて

- ・アクティブ・ラーニングの推進〔VTRで紹介〕：数学A、日本史演習、オーラルコミュニケーション（各教科でアクティブ・ラーニング推進者を設け、アクティブ・ラーニング推進者はその推進役を担っている。）
- ・成績と進路実績との関連データの作成：5つの私立大学について、データ作成を試みた。今後、さらなる改良に向けて工夫をする。
- ・家庭学習時間の把握に向けての準備：2学期または3学期の調査実施をめざす。
- ・心のケアについて：「①心理学的側面、②医学的側面、③福祉行政的側面、④芸術的側面」を意識して取組みを考えていく。②についてはなにわ生野病院心療内科部長生野照子氏と提携、④についてはアートミーツケア学会及びNPO法人アーツプロジェクトと連携。

(6) 協議〔[1]平成27年度学校経営計画に係る取組みの推進について

[2]参考にしたい他校の取組みを活かす方策について〕

＜生徒の学力向上、教員の授業力向上、特に、アクティブ・ラーニングの推進について＞

委員：アクティブ・ラーニングの仕組みをVTRで具体的にみることで、非常に分かりやすかった。昔、友だちと家で集まって、試験勉強などをワイワイガヤガヤとやったやり方と似ている。学校がこのような指導することにとっても意味があると思う。生徒たちが活発に意見交換できている。先生には質問しにくい、生徒どうしなら質問しやすいし教え合いができる。どのようにグループ分けをし、どのようにして重要ポイントを生徒に気付かせるかという点で、教師の力量が問われることになると思う。アクティブ・ラーニングはよい取組みなので、積極的に進めてほしい。

委員：アクティブ・ラーニングは、昔からある授業方法であって、決して新しい手法ではない。アクティブ・ラーニングの手法で、めざす学力を身に付けさせなければいけない。この間、小・中学校で授業づくりにおいて大切なこととして言われてきたのが、達成目標と向上目標であり、体験的な目標である。驚きと気付きと味わい、こういった体験的な目標が大切であり、これらを意識すると、授業が活性化すると思う。

委員：高校・大学で問われているのもそういう授業である。生徒の興味・関心を最大限集めるためには、教師の情熱と力量、そして、子どもの驚きと気付きが不可欠であり、そのようなアクティブ・ラーニングは昔からあったものである。あまり複雑ではなく、シンプルなスタイルで行えば、授業もスムーズに進むし、効果的であり、課題の設定も生徒にとって分かりやすいものになる。

委員：小・中学校においては、アクティブ・ラーニングは当たり前、とよく言われる。中学校では、評価方法の見直しを行い、「目標に準拠した評価」に転換してきたが、それが、とどのつまり、アクティブ・ラーニングに行き着くのである。

委員：1時間の授業の中で、生徒との双方向のやり取りをいかに保障するか、生徒と先生とがどれだけ双方向で授業展開できるか、そして、最終的な目標としては、保護者が納得するところに行き着けるかどうかである。そういう点で、中学校の教員の立ち位置に難しさはある。

委員：長年、一斉講義式で授業を行ってきた教員にとっては、授業観の転換はなかなか難しい。その点、高校ではどうか。

事務局：そういう面は、高校でも少なからずある。今から30～40年後、日本の人口が現在の1億2千万人から減り続け9千万人を割り込む時代になる。生産年齢人口も現在の約半分の4千万人台になり、多くの高齢者を少ない働き手で支える時代になる。これが、今の生徒の今後置かれる状況であり、とてもたいへんなことになる。中央教育審議会の答申でも指摘されているように、そのようなたいへんな時代を生きていかなければいけない今の生徒たちには、これまでの教育をそのまま続けていてはいけない。そういったことの重要性を我々教員がいかに自覚していくか、それが鍵である。

委員：授業アンケートが定着してきたが、それをどのように授業改善に生かし、どのように先生方に反映されているのか。

事務局：個々の教員に集計結果の個票を渡して、授業改善に活かしていただいている。それとともに、教科ごとに話し合いの場を設けて、それ以降の授業の工夫の在り方を教科として検討していただいている。また、ご存知のとおり、教員評価にも活用することを義務付けられている。

委員：他校視察の内容や、最近の高校での授業をVTRで見せていただいた。今回の協議会は、とても有意義なものであった。

委員：授業では、生徒を引き付ける力が大事だと思う。アクティブ・ラーニング的な授業で私も学びたいと思った。このような授業を受けると、子どもたちも積極的に話し合えると思う。授業参観のときは、なかなかこのような授業に出会えなかったが、今日、VTRで活気のある授業の様子を見ることができてよかった。実際、私の子どもも芦間高校での3年間で積極的になった。これは、このような活気のある授業があるからだと思うし、このような授業の内容をこれからはもっと期待する。

事務局：今言われている「アクティブ・ラーニングの推進」がうまく進んでいけば、授業参観の場でも、活性化した授業を多く見ていただけるようになると思う。

＜生徒の家庭学習時間について＞

委員：中学校でも、家庭学習時間の少なさについては、言われ続けている。高等学校でもそうなのかという感じである。特に、守口市は、土・日にあまり勉強しないので、放課後学習の取組みを推進するよう言われている。また、授業のユニバーサルデザイン化ということについてもすでに導入して3～4年になるが、高校でもこういうことをやらなければいけない時期に来ているという感じがする。

事務局：先ほど述べたように、今の若者にとって、今後の社会がたいへんな時代に入っていくのに、その若者が勉強しなくなっている。若者の勉強時間は海外に比べてかなり少ないというのが現状である。勉強時間の少なさに関しては、中央教育審議会の高大接続部会でも話題に上り、それが先ほど議論いただいた「アクティブ・ラーニングの推進」そして「学習指導要領の改訂」へと繋がっている。

委員：高校生はもとより大学生の学習時間も減っている。世界的に見ても少ない。ベネッセの調査では、少ない要因としては、クラブで疲れていて勉強ができないなどのことが挙げられている。また、今の子どもは、家庭学習の計画を自分で立てることができない。私学の学校では、「いつまでに～をする。」という計画表を出させて、グラフにして視覚化を図り、担任がそれを活用して生徒指導に充てている。家庭学習は、アクティブ・ラーニング型の授業と連動させてはじめて身に付いていくと思う。

委員：勉強合宿は実施しているのか。ある府立高校で、100時間勉強合宿をさせたことがある。意味のある仕掛けをどんどんやればいいのかではないだろうか。

事務局：勉強合宿は、他校で結構取り組まれているが、本校では学校としては取り組んでいない。

事務局：学習マラソンという校内での取組みは実施している。また、8期生は、守口市内の施設を借りて、金・土の2日間勉強会をした。また、現在、校内の自習室において、自主的に勉強できる環境を作り、紙にグラフを書いて学習時間を記録させている。一番朝早い生徒は朝7時から、帰りも夜7時頃になり、20～30人くらい勉強している。入学時に偏差値の低かった生徒が関関同立に合格するなど、ある程度の勉強環境の整備がなされているから、このような実績も残せていると思う。

委員：京都の府立高校では、1・2学期の中間テストの2週間前から家庭学習時間の調査を実施している。年1回でもよいから、そのような調査をしてみてもどうだろうか。

事務局：学力向上プロジェクトでいま取り組んでいる「家庭学習時間把握のための調査」について、早急に進めていきたい。

委員：京都の府立高校では、高校生が企業の若手社員に1日密着して仕事を見るという体験を実施している。1年生の早いうちに、インターシップ的な経験をさせるのがよい。3年生では遅い。また、大学見学にも行かせている。社会見学や大学見学といった仕掛けをして、働く意味や勉強する意味を分からせることが重要である。

事務局：本校は総合学科であり、「産社」や「総学」においていま言われたような観点でのキャリア教育的な取り組みは行っている。2学期早々にフィールド・トリップという大学見学の取り組みを予定している。

委員：卒業生の活用などはしているのか。土曜日などに卒業生に勉強を見てもらうような取り組みをして、生徒の学力向上に繋げている学校もある。その取り組みで効果を上げている学校もある。

事務局：取り組んでおられる学校があるのは聞いている。検討してみたい。

<成績と進路実績との相関データについて>

委員：評定と大学合格との相関関係については、生徒への進路指導、教員の情報活用といった観点で重要である。評定平均値と大学の入試科目や入試方式とのマッチングという観点で、入試方式、つまりAO入試、一般入試、センター利用入試などで分けてデータ分析すると相関が出やすい場合がある。

事務局：興味深い。分析方法を教えてください。

委員：成績と進路先データと家庭学習時間をリンクさせて分析したらどうか。評定は低いが、合格している生徒もいる。それにはそれなりの理由があるはずである。例えば、3箇月間毎日10時間勉強して合格したというケースもある。過去に遡って、調査をすれば、成績と進路先データと家庭学習時間とは必ずリンクするはずである。

事務局：検討してみたい。

<自己管理、スケジュール管理、PDCA手帳について>

委員：PDCA手帳は、全生徒にぴったり合うとは限らないが、スケジュール管理や自己管理のきっかけになるかもしれないし、手帳を手にとると書きたくなると思うかもしれない。でも、今は、アプリ（携帯）でスケジュール管理をする子どももいる。逆に、子どもどうしてスケジュール管理をさせるということで、アプリでスケジュール管理的な手帳代わりになるものの作り方を教えるということもよいのではないだろうか。いずれにして、PDCA手帳またはそれに類するものをスケジュール管理の導入やきっかけにしていけば、効果はあると思う。

事務局：PDCA手帳は、前校長のお勧めである。生徒にとって有効であれば検討したい。

委員：高校生活において必要となる、進級や卒業の要件、懲戒などの規程等を手帳に載せるのもよい。また、目標を立てるための取り組みと合わせて、手帳の使い方を入学当初に教えてあげるのもよいのではないだろうか。自分の夢に向かってスケジュール管理をさせるのもよいと思う。例えば、3年後の自分を思い描いて、その夢に向かって、今何をするのか、といった視点での「ある企業が考案した手帳」も世に出ている。いろいろ工夫して使っていけると思うが、どうだろうか。

事務局：検討してみたい。

<生徒の心のケアについて>

委員：心のケアについては、小・中学校でも喫緊の課題である。また、特別支援教育の取り組みが、中学ではすでに定着している。スクールカウンセラーの配置や先ほど述べた授業のユニバーサルデザイン化等は、導入して3～4年になり、定着している。高校でも、そのような支援教育の観点を含めた心のケアが必要であると感じる。

事務局：心のケアを必要とする生徒が、本校では比較的多い。学校で抱えきれぬのが心配である。教員がパンクする可能性がある。心理学的側面、医学的側面、福祉行政的側面、芸術的側面等、専門的な立場での支援が必要な時代に入っていると思われる。前任校でホスピタルアートを導入し、生活指導面で効果があった。生徒のためにできることを模索し続けたい。

(7) 報告〔教科書の選定作業について〕

○教科書の採択の手続きと、採択のポイント等について説明。

(8) 事務連絡

◎第2回は、2学期中後半の土曜日に実施予定。詳細については、後日に連絡させていただく。

